

【ねがいましては】

令和4年11月10日

KYOWA SCHOOL

第381号

「既存の危険性」

既存、以前からあるもの。以前からずっと続いていること。その代表的存在が「テスト」です。ただし、この「テスト」にも環境によって捉え方が違ってきます。まず皆さんおなじみの「学校でのテスト」・・・点数が現れ、それを子どもたちの評価にあてる。中学校以降では順位なるものが現れる。これが子どもたちの認識している、また親も同様に認識している「テスト」です。そして追い打ちをかけるように、時折新聞内のチラシに顔を覗かせる「成績が上がる」という学習塾の名言？

もうひとつのテスト、何か新しい機械を製作する段階で、それが製品化、または実現化できるか何度も繰り返し行うこと。例えば自動車をつくる際に、その車をずっと走り続けさせ、変わらぬ性能を維持できるのか。例えばロケットを打ち上げる際に、エンジンの出力がほぼ100%異常なく継続されているか、などなど。前者は、比べることがどうしても目的のように感じてしまいます。これは子どもたちや親の側の受け取り方です。教師側からすれば、通知表を作成する上で必要な情報となるのでしょうか。後者は、複数台または単体を限りなく極限に近い状態で使用し、破壊など事故が起こらない状態へと性能を高めるための試練とでもいうのでしょうか。おそらく「壊れる」「機能停止」は当たり前なこと、からスタートしているはずですが。

この後者の「テスト」については、私たちが生活する社会で役立てるための避けては通れない「テスト」であるはずですし、また誰もが「そうでなくては安心を得られない」と感想を述べるでしょう。在って然るべき行為になるはずですが。テストなしに「ハイできました。どうぞお使いください。」などと目の前に出されたら、どうされますか？

問題は前者です。いつのまにか「比較」を目的とした「当たり前」が、子どもたちをとりまく「テスト」になります。理科の教師が実験中に「それではテストしましょう」言ったとたん「どきっ」と、こころが騒いでしまう子はけっこういるかもしれません。本当はAの液体とBの液体を混合させて、どのような反応が見られるかの実験だったのですが、それを先生が「テストしましょう」と発言したに過ぎなかったのですが。

そのくらいに子どもたちにとっての「テスト」という言葉の反応は感情を目覚めさせる危険な「もの」の一部になっています。テスト→どうしよう→やだな→あー憂鬱！この連鎖が一瞬にしてこころの中をぐるぐると駆け回るのが見えるようです。そこまでこころを暗くしてしまう存在であるのなら、誰かがその気持ちを和らげてあげなければならないと思うのです。本来教育現場でテストがもつ重要な目的とは、子どもたちがそれぞれどのくらい理解しているのかを確認するためのものであるはずですが。であれば、テスト結果が出た段階で、この子はこの部分に理解が不十分なためこのような解答をしたのだなど、指導者がその誤答部分の原因究明に努め、さらに今後同様な誤答をしないように再指導するべく取り組むことが当然だと思います。が、現実はどうでしょうか。

特に大きな問題となってしまうのが選択問題です。合えばよいのですから、まぐれ当たりでもほとんどの子どもたちは、「先生、これ、たまたま選んだら合っていたんですけど、本当は全くわからないままなんです。だから教えてください。」などと来るでしょうか。このような調査を文科省はするべきです。

これをお読みになっている方のほとんどが自ら子どもに戻ったとして、同様な事が起きたらどうされますか？これ、学びになっていないのです。この重大な行為がおそらく「テスト」→「子どもたちの比較」という目的で使用された段階から現在まで、本来の目的を失ったままになっていると思います。つまり既存のテストがそのまま今に至っているのです。

子どもたちによく問いかけるのですが、「フツーに考えてみてください。選択問題で、もしまぐれで合ってしまったとき、本当はわからないままなのだけれど、そんな時間に行きますか？」「選択問題でわからなかったとき、わからないのだから選ばずに空欄にしておきますか？」です。この質問にほとんどが・・・です。想像されるとおりです。そのくらい私たち大人も子どもの時から選択問題については、同じような行動をとってきたのです。(私もそうでした)

誰かが「いや、それはどう考えても正しい行動ではないよね。だから質問しに行こう。」と、促し続けなければいけないと思うのです。で、私は続けたいです。少なくともここでは自然な質問です。ここでは「テスト」(子どもたちを比較する)はありませんので、やるとしたら個人で過去問題やまとめの問題などをしたりはしますが、その際に今まで全く行ったことのない行動ができるよう促し続けたいと思っています。

自然体で向かえる勉強を子どもたちに注ぐことが真の教育だと思います。それには協力者が必要になります。今の既存のテストから発生する「あってはならない恐怖心」を排除するべく果敢に立ち向かっていただく協力者です。それがご家族になります。まず、戻ってきたテストの数字には目をとめません。注がれるのはただ一点、間違えになっている「ペケ」の部分です。それがなぜ「ペケ」になってしまったのか原因を探る行動です。それを習慣化させることで、子は徐々に安心感を覚えていきます。もし、選択問題で選ばず空白があったのなら「えらい！」って褒めてください。

パチパチパチ、お子さんの笑顔が復活した瞬間をどうぞ！